

幼稚園・保育園におけるムシの飼育についての実態研究

○山下 久美 (埼玉大学大学院教育学研究科)

五十嵐裕子 (玉成保育専門学校)

I 研究目的

虐待など命の軽視が問題とされる昨今、動物教材は生命の不思議さや神秘性、畏怖の念など多くのものを子ども達に与えてくれる教材であると考えられる。しかし、動物教材でありさえすれば、どのような条件下であっても、同じような効果があるとも言えないだろう。例えば、幼稚園や保育園で飼育されることの多い、ウサギ・モルモット・文鳥等は、その柔らかく暖かい感触と愛らしい動作で、子ども達を無条件に惹きつけるものであるが、高齢になると病気も多く、病気の動物を放置すれば「命の尊重」というねらいとは逆効果の教材ともなりかねない。小型であっても哺乳類や鳥類の飼育には、ある一定の年数責任を持たなければならない難しさが有る。

その点、ムシ類(昆虫や節足動物などの小さな無脊椎動物)であれば、忙しい保育者でも負担なく飼育でき、また比較的短期間で一生のサイクルを見ることが出来るものもある。このことは同時に、幼児でも簡単に世話ができるということであり、また長い時間を想像し見通すことが困難な幼児にとっては、ふさわしい教材といえるだろう。このような利点のあるムシであるが、保育園・幼稚園では、その飼育を現在どのように行っているのだろうか。実態調査を行い、子どもへのよりよい提供について探る第一歩としたい。

II 研究の方法

1 調査時期・調査対象・手続き

2003年6月から8月に東京都・埼玉県・神奈川県、幼稚園・保育園53園にアンケート調査を実施し、そのうち38園(71.6%)から回答を得た。

2 調査項目

- (1) 園の所在地
- (2) 回答者の年齢・保育経験年数・性別・子どもの頃のムシとの関わりについて
- (3) 園での虫の飼育について
 - ①ムシを飼育しているか否か、クラスによって飼育頻度に差があるか、飼育の決定は誰が行うか
 - ②ムシの飼育理由、または飼育しない理由について
 - ③飼育しているムシの種類について
 - ④ムシの生態サイクルと飼育期間

III 結果と考察

1 園の所在地とムシの飼育との関連について

今回の調査からは、飼育頻度に地域差は特に認められなかった。ムシ類は園庭や小さな緑地さえあれば生息可能であるため、大きな差がなかったことも考えられる。

2 回答者の年齢・保育経験年数・性別・子どもの頃のムシとの関わりについて

表1～3によれば、保育者(回答者)達は年齢が若く、経験年数が少なく、女性が多いことが分かる。今回の調査は、1園につき1代表者からの回答を受けるものであったが、このような場合、園長や主任が答える割合が高くなると推察される。そのため実際の保育現場では、さらに年齢や性別のこの傾向は強いことが考えられる。

表1 保育者の年齢

20代	39%
30代	34%
40代	8%
50代	3%
60歳以上	16%

表2 保育経験年数

10年未満	63%
10～20年未満	18%
20～30年未満	8%
30年以上	8%

表3 性別割合

男性	9人	24%
女性	29人	76%

表4 子どもの頃のムシで遊んだ経験

よく遊んだ	27人	71%
少しは遊んだ	7人	18%
殆ど遊ばなかった	2人	5%
無回答	2人	5%

表3と4の結果をクロスさせると男性保育者の100%が子どもの頃ムシでよく遊んだと答えているのに対し、女性は62%であった。少し遊んだ、あるいは殆どなかったは31%で、無回答も7%あり、子どもの頃のムシとの関わりには、明らかな性差があった。

3 園でのムシの飼育について

- (1)ムシを飼育しているか否か、クラスによって飼育頻度に差があるか、及びその決定について

表5 園でムシを飼育するか

はい	95%
いいえ	5%

表6 自分のクラスで飼育するか

はい	87%
いいえ	11%
無回答	3%

表5によると、95%と殆どの園でムシを飼育していることが分かる。しかし、表6から回答者自身のクラスでムシを飼育する割合は、園全体と比較すると低くなり、

10%強の保育者が飼育したことがないと答えている。

表7の結果からもムシの飼育頻度は多くの園でクラスによって差があることが示された。それは図1に示すように、ムシの飼育は多くの場合

表7 クラスによって飼育頻度に差があるか

ある	63%
ない	26%
無回答	11%

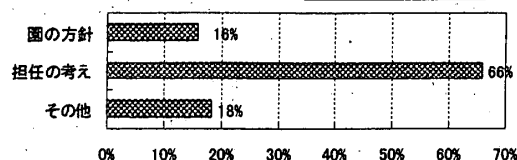


図1 ムシの飼育は誰が決めるか

担任が決定するからであると考えられる。担任の考えによるのは、66%で、その他の内容も「どちらとも言えない」「クラスの子どもが望んだら」などとなっており、担任の裁量が強いことが伺える。「園の方針」としているのは16%だけであった。

(2) ムシの飼育理由、または飼育しない理由について

表8 なぜムシを飼育するのか

自然物に触れる経験をさせたい、虫の生態を知らせたい	68%
命というものを感ぜさせたい、知らせたい	58%
子どもが興味を持っているから、好きだから	55%
子どもの成長に役立つ、やさしさ、責任感が身に付くから	24%

表9 虫を飼わない理由

嫌いで触れないので、飼えない	3人
園の周囲に自然がなくムシがいらないため関心がなかった	1人

自由筆記の回答をカテゴリー化した結果は表8のようであった。また38人中、4人の保育者が「ムシを飼育しない」と回答しているが、その理由は表9のとおりである。この4人はすべて女性であった。嫌いで触れない3人のうち2人は、表4の中でムシと殆ど関わらなかったと回答し、残る1人も関わりは少なかったと答えている。

(3) 飼育しているムシの種類名について

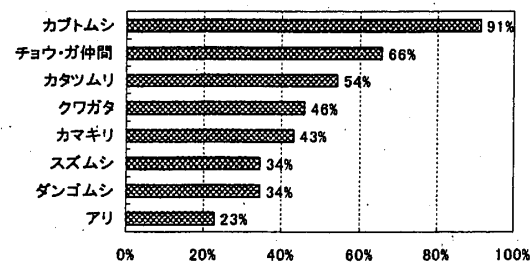


図2 園で飼うことが多い虫の種類名

園で飼育されることの多いムシの種類名は、図3に示すようにカブトムシが圧倒的に多く91%にも上っている。その他、クワガタ46% (4位)、スズムシ34% (6位) も園

庭やその周囲に身近に生息しているものではないが、飼育率が高くなっている。このような種類を飼育することが多いのであれば、園の所在地によってムシの飼育率に変化がないことも肯ける。

2番目に多く飼育されているのは、チョウとガの仲間であった。明確な種類を挙げられなかったのは、「アゲハチョウ」や「モンシロチョウ」というように明記されているものが少なく、チョウ・ガ・青虫・毛虫というように記されているものが多かったためである。

(4) ムシの生態サイクルと飼育期間

園でムシを飼育する場合、図3に示すように全サイクルを通して飼うことは少なく、一時期の飼育が多くなっている。

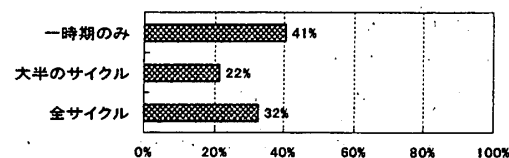


図3 飼育は一時期であるか

IV まとめと今後の課題

今回の調査から、ムシ類は多くの園で飼育されていることが確かめられた。しかしその一方で、ムシの飼育経験は子どもたちにとって、必ずしも重要だとは捉えられていないのか、飼育するか否かの判断は多くの場合、クラス担任である保育者に任されている。保育者の多くは女性であり、子どもの頃のムシとの関わり及び保育室での飼育状況には明らかな性差があった。女性保育者の回答の中には飼育しているムシの名前を青虫・毛虫と記述しているものもあり、種類も分からないまま一時期保育室に置いておくというようなことも推察される。

その飼育理由は、幼稚園教育要領にあるように「自然物に触れる経験をさせたい」「ムシの生態を知らせたい」などが一番であったが、そうであるならば園で多く飼育されている種類がカブトムシであることに、疑問が生じる。その餌には(クワガタも同様であるが)、市販されている専用のゼリーやおがくず等、人工的なものが用いられていることが多いからである。その点、チョウ類やダンゴムシ・アリなどであれば、本来の生態に近い状態で保育室の中で飼育することができる上、自然界の姿も園庭やその周囲で確認することができる。このことは子どもがその生態を知る上で、大きな助けとなるだろう。

こう考えてくると、多く飼育されているムシ類ではあるが、扱う種類や飼育の仕方などについて今後検討を進めていく必要性を感じる。そのことにより、ムシ類は子ども達にとってさらに意味のある教材になると思われる。